

ナサニエル・ホーソンの研究（その四）

— The Wedding Knell の一考察 —

江 草 清 子

（教育学部英語研究室）

A Study on Nathaniel Hawthorne (No. 4)

— The Wedding Knell —

Kiyoko EGUSA

はじめに

The Wedding Knell は1836年に *Token* 誌に発表され、その後 *Twice-Told-Tales* の中に収められた極めて Allegorical な作品である。 *Token* 誌に同じ年に発表されたものに *Minister's Black Veil* や *The Maypole of Merrymount* があるが、これらに比して *The Wedding Knell* は一読しただけでは可成り見劣りの感じられる作品であるが、更に熟読を重ねてアメリカ文学の根底を流れる Puritanism の伝統の中でこの作品を捉え、聖書的解釈を試みる時、非常に象徴的な深い意味を持つことが発見されるのである。

その上、1836年の出版といえれば作者30才頃の作品であって、ホーソンはその翌年1837年に初めて Sophia Amelia Peabody と出会い、やがて愛し合うようになって、その後数年のうちに婚約、結婚へと進むのであるが、こうした一身上の事情からみても、作者自身のうちに何らかの結婚観が形成されていた（或はされつつあった）のではないかと推測して、*The Wedding Knell* がホーソンの人生観、結婚観を解釈してゆく上での一助にもなればとこの小論を試みることにした。

そもそも人生の最も喜ばしい門出である“Wedding”に於て喜びの象徴としての明るい軽快な“Bell”が鳴らされないで、それとは対照的な吊いの鐘ともいうべき殷々たる“Knell”が鳴らされるというこの皮肉、又花婿が結婚衣装として経帷子を着て式場に現われたというこうした皮肉な事件を通して作者は一体何を語らんとしているのであろうか。キリスト教的文化とは全く異なる文化のもとにある日本人にとっては、この作品は一見極めて風変わりな人間の奇行としてのみうつり、大した意味を持たぬかも知れないので、特にそうした見逃され易い、又誤解され易い個所について聖書の立場からの肉迫を試みようとした。

1. あらすじ

この物語りはニューヨークのある教会で作者の祖母の時代に実際にあった話だと作者は物語りの初めで云っている。

主人公エレンウッドの若き日の婚約者の女性はやむない事情で婚約を破棄して二倍も年上の裕福な人と結婚をする。（その事情というのが家庭の都合で親の強要によるのではないかと想像させられる点は『緋文字』の女主人公 Hester Prynne の運命に類似している。）彼女は典型的な妻として夫に仕えるが、やがて夫は死ぬ。莫大な遺産を相続した未亡人はこんどは彼女より遙かに年下の南部の男と再婚をするが、彼との結婚生活が絶えず悩み多いものであったことは作中にみられる次のような表現から想像しうる。

“(1)...many uncomfortable years...”

“(2)...the unkindness of her Southern husband...”

“(3)...the dislocation of the heart's principles, consequent on a second union...”

しかし乍ら夫の死によって彼女は再び未亡人となるが、気苦勞の絶えなかった結婚生活であった為、彼の死はむしろ彼女にホットした思いを与えるのである。やがて彼女は故郷に帰ってくる。そこには最初の婚約者エレンウッドが、彼女から受けた痛手の為に生きがいを失ない、以来45年の間、世間からは変人とみなされ乍ら半ば隠遁した独身生活を続けていた。ところが人の噂さによれば専ら彼女の方からの働きかけで両者の間には幾十年の才月のへだたりの後、最初の恋の成就がみられようとするのである。即ち結婚式がとり行なわれる段取りとなる。

さて結婚式の当日、花嫁は年とったしわの顔に厚化粧をし、豪華な花嫁衣装を身につけてうら若い乙女達をお供に従えてやってくる。一行が式場にはいるとその乙女達のはなやかさのゆえにうす暗い教会の内部迄がパット花が咲いたように明るくなるのだが、それにも拘らずその時頭上の教会の塔からは不吉にも吊いの鐘の音が重々しく打ち鳴らされるのである。会衆は一瞬ギョッとさせられるが、心中むしろ似合いの鐘の音だと思う者もある。やがて遅れて葬式の一行が教会に着くので、誰か死人があったのかと思ううち、実はそれは花婿の一行であることがわかる。会衆は皆愕然とするが、多くの人生経験をへた花嫁のみはいち早くその驚愕から立ち直り、なんとかして結婚式を遂行しようと、乙女達を督励して健気にも祭壇へと進んでゆく。牧師を前にして“Cruel! Cruel!”と呼んでエレンウッドを非難する彼女に向って、花婿エレンウッドは諄々と積もり積もった45年間の彼の胸中を吐露する。即ち若き日に彼の幸福も希望も人生の目標も奪った上、他の男と二度も結婚し、年をとって心も肉体もむしばまれた今になって故郷に帰ってきて、彼を結婚へと誘った。しかし彼女の生命ともいうべき若さ、美しさ、水々しい心といったものはこれまでの夫達がみな享樂し尽くしているので、彼に残されたものは今や朽ちた身体と死のみなのではないか。だから今日の結婚式は墓場の入口で手を結ぶ二人に応わしいように、結婚の鐘の代りに吊鐘を鳴らすようにと寺男に頼み、又彼自身も経帷子を着てきたのだという。彼のこの乱暴なまでの非痛な言葉に突然まるで恐き物が落ちたように一瞬にして彼女からこれ迄の一切の空虚な虚栄が消えさって、人生の晩年のその瞬間に彼女は始めて真実の感情を取り戻すのである。彼女の言葉を借りてみよう。

“(4) My life is gone in vanity and emptiness. But at its close there is one true feeling. It makes me what I was in youth; it makes me worthy of you. Time is no more for both of us. Let us wed for Eternity!”

エレンウッドも深く感動してその死人のような無表情な顔から涙が流れる。会衆の涙と感動の中にやがておごそかに結婚式が行なわれるが、式の終りに当って、作者は“(5) the organ's peal of solemn triumph drowned the Wedding Knell.”という言葉で作品を結んでいる。

さて以上のあらすじを通してみられる花嫁の変貌をどうみればよいのか? 又作中の“(6) the stern lesson of the day”とは何んであるか、或は又花嫁のいった“Let us wed for Eternity”とはどういう事なのか、そして“Time”と“Eternity”の関係はどうか等について解釈を試みてゆこうと思う。

2. 主要対立要素

ホーソンはしばしばその作品中で対照的な二つのものを配材してそのコントラストの効果によって読者を引きつけているが、*The Wedding Knell* に於ても同様の手法が用いられている。以下にその主要な対立要素を表にして示すに当って先ず“明”と“暗”の二つの範疇に分け、作中の言葉をそのまま各々にあてはめたが、これはFogleの云うような明と暗を意味するのではなく、あくまで対立ということを意味するに過ぎない。

主要対立要素表

明	暗
(1) Wedding (Bell)	Funeral (Knell)
(2) Bridal party composed of youth and gayety	Funeral Procession of aged mourners
(3) Wedding dress	Shroud
(4) Brightest splendor of bride's attire	Physical decay of bride
(5) Fair, young bridesmaids	Old, wrinkled bride
(6) Celibacy of gentleman	Remarriage of lady
(7) Eternity	Time

ホーソンの作品に見られる根本的な二大対立要素は“*Heaven*”と“*Earth*”である。これは上記表の(7)に示された“*Eternity*”と“*Time*”に云い換えることが出来るものである。筆者がこれまでホーソンの作品についての小論で述べてきたように、彼の用いる“*Heaven*”と“*Earth*”はまさに聖書に於ける『天国』と『地上』の持つ意味と同じであって、それは朽ちるものと朽ちざるもの、或は又滅びることのない永遠の世界、即ち神と神に属する世界と、他方はそれを除く一切の森羅万象の世界という風に云い換えることが出来るであろう。さてこれら二大要素を土台として、彼の作品には更にその中でコントラストの効果をねらって、実質的に光と闇、強と弱、物質と精神、鈍感と敏感といったものが繰り返えし対立的に使用されている。しかしこれらの対立は必ずしも二大要素“*Heaven*”と“*Earth*”の pattern を追っているというわけではない。上記表をみると、(1)から(6)までの対立は“*Earth*”の範疇に属し乍らその中で各々が面白い対照をみせている。(7)の *Eternity* と *Time* は云い換えれば *Heaven* と *Earth* である。

さて(1)についてみるに、wedding bell も funeral knell も共に鐘の音に変わりはないが、目出度い結婚式と悲しい葬式と各々の場合の雰囲気にならざるやうに鐘が鳴らされるのである。全く相反する鐘の音であるが鳴らし方には特にきびしい作法があるわけではないようである。(2)は美しく着飾った若々しい楽しげな乙女達に付き添われた花嫁の一行と“(7) a dark procession”として教会へくり込んできた花婿の一行との対照である。しらが頭と青い顔を除いては全員黒ずくめで、杖にすがったり互いに支えあってよろよろと入ってきたこの葬式の一行と、まるで舞踏会にも行くような軽ろやかな足どりで華やかな衣装をつけて入ってきた花嫁側との対照は視覚には白と黒、若と老、華と衰といったコントラストで極めて効果を挙げるシーンである。同年に発表された *Minister's Black Veil* に於ても或る朝突然牧師がその顔に一枚の黒の紗の布をつけて説教壇に現われるという人の意表をつく同様な手法をここでも用いている。フーパー牧師もそうする事によって何かを象徴しようとしたのだし、エレンウッドも経帷子を着る事によって何かを訴えようとした点は類似している。しかしフーパー牧師は“veil”をつけることによって誰しもが持つ人間の原罪を訴えようとしたのだが、エレンウッドは経帷子によって何をいいたかったのであろうか。作中の“the stern lesson of the day”とはどんな lesson であろうか。これを先ず解くことがこの作品理解の上の主要点であろう。(3)は人生の門出につける婚礼衣装と、人生を去るに当って着る死に装束との対照であり、(4)は既に60の坂を越して顔は皴、肉体は衰えてしまった花嫁がその身体に“(8) the brightest splendor of her attire”を装った姿であって、みた眼にはただこっけいでしかなく、しかもその無自覚さにこっけいを越えて衰れさが伴うのである。(5)も又同様の心情を読者にさそうものである。若く美しい乙女達に付き添われた老花嫁を作者は次の様に表現している。

“...⁽⁹⁾an old, brown, withered rose, on the same stalk with two dewy buds,—such being the emblem of the widow between her fair young bridesmaids.”

一本の枝に咲く水々しい二本のバラの蕾と既にしなびて茶色になった古いバラの両者を眺める時、すべての人間にいつかは必ず訪れる「勝者必滅会者常離」なる天地自然の理をそこに見るのであるが、その自然の理に猶も抗って、濃い化粧に美しい衣装をまとっている老花嫁の姿に人間のわびしさが一層濃くうき出される。

さて(6)に於ては主人公と女主人公の対照的な40余年の人生の歩みがみられる。婚約に破れた主人公は65才の今日迄独身を通してゐる。隠遁生活というわけではないが未だに世間ずれがせず、生涯を学問に親しみ乍ら暮してきた人。しかし失意の為に人生の希望も失ない、愛する家族もなかったの、この世の野心もなく唯自分の内面的なものの追求に丈生きてきて、世間の事は余り気にかけないで生きてきた。

一方女主人公の方は既に述べた通り婚約を破棄して以来既に二人の男性と結婚をし、今や未亡人である。最初の夫は二倍も年上の金持ちであったし、次の夫は年下で放蕩な南部男であった。年を経ても自然の理にさからって何んとかして若さと美貌を保とうと必死になっている。いふなれば人間本来の特質ともいふべき霊のことは忘れて、朽ちゆくものに心奪われた虚栄の生涯であったといえよう。(7)については既に述べたが、この様に凡ゆる面に対照的な主人公と女主人公が、やがて“Time”の世界から“Eternity”の世界へと共に手を取り合つて人ってゆくことになるのである。それがどういう事を意味するかに付ては次章で論じよう。

3. 聖書的解釈

(1) ホーソンと聖書

ホーソンが聖書を非常によく読んだ事は⁽¹⁰⁾ 疑う余地なく、彼は自分の読んだものには手紙や彼の *Notebooks* にコメントを書くようなことはしなかったが聖書に付ては例外であったのみならず、⁽¹¹⁾ 聖書の事を直接的に或は間接的に *Notebooks* の中で述べている。John Cline はその学位論文 *Hawthorne and the Bible* の中でホーソンがどんなに沢山聖書からの引用や或は暗示をしているかを明らかにした中で、ホーソンが彼の作品へ聖書から直接引用したものでは旧約聖書から17回、新約聖書からは22回引用したとし、暗に言及したものでは旧約から104回、新約からは141回、quotation と allusion を併せれば 287 回に及び、彼が好んで用いた個所はマタイ伝 (45 回言及)、創世紀 (40 回言及)、詩篇、ヨブ記、箴言、ルカ伝、マルコ伝及び黙示録であるとしている。

又その家系にピュリタンの血が流れ、且つピュリタニズムの伝統が猶お浸透していた19世紀前半のニューイングランドに於いて、ホーソンの生活の中での聖書の占める割合や役割が凡そ想像に難くない。この事は又ホーソン夫人による *Passages from the American Notebooks* や Julian Hawthorne による *Nathaniel Hawthorne and His Wife* の中でも家長たるホーソンが聖書と家族のものに読んでやるのが特に子供が小さかった時には家庭の習慣とした事や或は又病人のある時、悩みの時、ことごとくに彼が聖書に慰めを求めたらしい様子がかがえる。勿論時代的にいってロマンティズムの風潮が滔々と流れこんできて、科学の発展をみようとした時代にあつてホーソンがピュリタン一色の人間であつたという立場を筆者はとるものではないが、聖書そのものが彼の中に浸透していたことは疑う余地はないと考える。従つて聖書的背景をさぐる事によって聖書が作品にどのように影響をしているかをみることはその作品の真の理解のために極めて重要なことと考える。

(2) 作品の聖書的背景

The Wedding Knell を読んで感じることはこの作品全体の組み立てが旧約聖書を一貫して流れている神と選びの民であるイスラエルとの関係、そして又墮落したイスラエルがイエス、キリストによって救われて、生が死に勝利するという聖書の体系をなすものと全く類似していることを発見するのである。以下にそれらについて詳述を試みよう。

(イ) 神と契約の民イスラエル

筆者は旧約に於ける神とイスラエルの関係の中にエレンウッドとその婚約者の関係の類似性を見出すものである。旧約に於て神はイスラエルをわが民として選び、これと契約を結ばれてモーゼを通して彼らにいくつかの事を命じられた。その中で主軸となるものは、「⁽¹²⁾あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない。」ということである。即ち神はイスラエルの民に契約をされて、神はとこしなへに彼らを守り恵む代りにイスラエルは丁度妻が夫に対するように貞節であることをきびしく求められた。この関係はエレンウッドと婚約者との関係に類似するものでひとたび両者の間に婚約が成立したからには互に不信であってはならない。特にこの事は聖書の中で又ピュリタン社会では強く求められることである。

しかし乍らイスラエルは選びの民に相応しくなく、神の戒めに背むいて色々の怪しげな宗教に走り不信行為を働くのである。この不貞、不信行為を責められるに当って神は予言者達の口を通して、丁度夫がその妻の不貞を責める態度で比喻によって⁽¹³⁾ 責めておられる。

創造主である唯一の神を忘れて邪教に走ったイスラエルの民に神は姦淫を犯した妻に対する夫の態度で臨まれたが、それはエレンウッドが結婚式に当って皮肉にも経帷子を着て現われ、辛辣な言葉の数々を吐露して彼女を責め、“the lesson of the day”を実施した当りに共通性が見い出される。この場合 the lesson は訓戒、おしおきといった意味であろう。婚約に破れてから45年間独身を通じた彼が経帷子を着て死人のように無表情な顔で筋道立って人倫の真理にふれて心情を吐露する時、そこには犯し難い力があったことと思われる。又婚約を破った彼女が二度の結婚に破れて最後に再び最初の婚約者エレンウッドの元に帰り結婚を求めた点は、丁度イスラエルが国家的に不幸にみまわれると元の神に還って救いを求めたのに類似性をみる。しかし乍ら神はそのまま彼等の願いをきき入れられたであろうか。いな神は予言者達を通して絶えずイスラエルに悔い改めを迫っておられる。エレンウッドの結婚式での怒り、恨みの言葉は同時に又彼女に深い反省をうながすものである。

(ロ) 悔い改めと救い

さてエレンウッドの言葉によって全く生まれ変わった彼女が、“Time is no more for both of us. Let us wed for Eternity.”というわけだが、これを東洋的に且つ浅薄に解釈をするならば、自分達はもはや年をとってこの世の生はもうないので、だからあの世で結ばれましょうといった程度の理解になるかも知れない。それでは余りにもホーソンらしくない浅薄な作品となってしまうことになる。これ迄二人の関係を神とイスラエルの関係に於てみてきた関係上これらの言葉にも聖書的解釈をあてはめてみたい。即ちここでいう“Time”とは一般にいう時間、即ちこの世で生きる時間は二人共もうないという意味と同時にもう一つ次の重大な意味を含んでいると筆者は解釈する。即ち“Time”は永遠の反対のもの、つまり永遠性を有さない一切のもの、云い換えればこの世に属する一切のものを指していると考える。二人にとってこの世的なものはもはや一切縁はないということの意味しておいて、ここに於て彼女がこれ迄捕われていた空虚な虚栄をかなぐりすて、新たな誕生を決意したことが示されていると解釈する。これはヨハネ伝三章一節からのイエスとニコデモの対話にみられるようにニコデモ的世界に別れを告げて新たに神の国に生れるということと類似するのである。

さて“Let us wed for Eternity”に付てみるに、聖書に於ては結婚はこの世丈のこととされて、死後の世界に於てはそのような関係は何らないとされている。従ってこの言葉を文字通り解釈すると矛盾をきたすこととなる。しかし乍ら聖書の中で永遠の結婚という言葉が使用されているのは只一個所ヨハネ黙示録の19章である。その意味するところはキリストと信徒の関係を表わすものである。これまでエレンウッドと彼女の関係を神とイスラエルの関係に於てみてきたが、その線を延長して二人の永遠の結婚ということを解釈する時、之は彼女が真に悔い改めてキリストと永遠の結婚をする。即ち彼女の人生の最後に当って始めて彼女が霊的な人となり得たことを示す言葉と解してよいのではないか。それでこそ現実にエレンウッドと結ばれ得る価値あるものとなったの

であり、これでこそエレンウッドが彼女に対しておこなった“lesson”も効を奏したといえるのである。

このように聖書の解釈を試みてる時、この作品は非常に深い寓意をもって読者に迫るのである。又最後にみられる“(14) And what is Time, to the married of Eternity?” 或は“funeral of earthly hopes,” “...the organ’s peal of solemn triumph drowned the Wedding Knell”等の言葉もこの解釈の線に添ってゆく時容易に妥当と考えられる解釈に至ることが出来る。信仰を得て神の世界に属するものとなったら物の価値観が異なってくるので、彼等にとってこの世の富や名声、美しく着飾る事又生そのものすら何んの意味があるのか。即ち“What is Time, to the married of Eternity?”である。又作中の“funeral”や“tomb”“shroud”といった語は極めて symbolical でこの世のものを望むころの死、それとの別れを意味していて、エレンウッドが葬式の一行を引き連れて結婚式に臨んだ事はとりも直さず彼女に虚栄との別離を迫る象徴として用いられたものともみることができ、“the funeral of earthly hopes”とは彼女が諸々の朽ちゆくこの世の望みをすてた、即ち彼女が虚栄をすてて真にエレンウッドのものとなった、つまりキリストのものになったということの意味するものだと思う。そして更に“the organ’s peal of solemn triumph drowned the Wedding Knell”に於ては葬式の鐘の音で始まった結婚式が真によるこびの結婚式に変えられるのであるが、これはどういうことであろうか。“shroud”はこの世的なものの否定を象徴するものといったが、之を着て式に臨んだエレンウッドに対して彼女は猶ほもまだ世俗的なものをすてきれず、“Cruel”と呼んだ次第であった。しかし乍ら最後には彼の勝利となって、彼女は敗北するのである。聖書の用語を用いるならば悔い改めて彼女が己れを十字架につけた時、一見それは確かに彼の前に彼女は敗北したかに見えるかも知れないが、同時に彼女はヨハネ伝三章にみる如く新たに永遠の世界に生れかわるのであるから、之は負けて勝つ、死んで甦るといふ勝利に入るための死であった。このようにして彼女はエレンウッドと永遠の世界に生きる人間となった事が示されていると思う。之を聖書の中で裏付けてみるとローマ人への手紙六章1節より11節、同じく十四章7節より9節、コリント人への第一の手紙十五章31節、同じくコリント人への第二の手紙五章14節より17節等に見い出される。作者は勿論キリストの十字架による救いと復活について何らふれてはいないけれども、意識的にしろ、無意識的にしろ、さうした聖書の背景がホーソンの中にあっただろうことは認めてよいのではないかと思う。

あ と が き

この作品が極く短かい奇をねらったプロットであることは先きに述べたが、上述のようにこれを聖書的背景に立って解釈を試みる時、新旧約両聖書に亘って一貫して流れているところの神との契約——契約違反——結果としての不幸、神の非難——悔い改め——復活という一大テーマが『結婚の吊鐘』という形をかりて象徴されているのを筆者は感じた。この作品によってホーソンの人生観、結婚観を決定することが出来るとは思わないが、奥深い彼の思考の洞くつの入口に立つことは出来ると思う次第である。

註

- (1) Norman Holmes Peason ed.: *The Complete Novels and Selected Tales of Nathaniel Hawthorne* (Modern Library) p. 867.
- (2) 同上書.
- (3) 同上書.
- (4) 同上書 p. 872.
- (5) 同上書 p. 872.
- (6) 同上書 p. 872.

- (7) Norman Holmes Peason ed.: *The Complete Novels & Selected Tales of Nathaniel Hawthorne* (Modern Library) p. 870.
- (8) 同上書 p. 869.
- (9) 同上書 p. 869.
- (10) Ely Stock: *Studies in Hawthorne's Use of the Bible* (University Microfilms, Ann Arbor Michigan). vi
- (11) Randal Stewart, ed.: *The English Notebooks by Nathaniel Hawthorne* (New York Russell & Russell) p. 43
Randal Stewart, ed. *The American Notebooks by Nathaniel Hawthorne* (University Microfilms, Ann arbor, Michigan).
- (12) 聖書: 旧約出エジプト記 20 章 2 ~ 7 節.
- (13) 聖書: 旧約エレミヤ書 3 章 14 節.
旧約エゼキエル書 16 章.
旧約ホゼヤ書 2 章.
- (14) Norman H. Peason ed., *The Complete Novels and Selected Tales of Nathaniel Hawthorne* (Modern Library) p. 872.

(昭和 46 年 9 月 30 日 受理)

